

服部文庫
117
49
1



717
49
1

牛馬問自序

或曰牛屬坤馬屬乾此書釋陰陽之
義乎曰否或又曰牛之馬之有悞
諺此書論筭畢不同欲之意乎曰否
孔子問人而不問馬丙吉問牛而不
問人所問雖異天理履同轍然則所
問有緩急有職分於今人亦何異邪
機杼之方問我以答無言行舟之



牛馬問

序

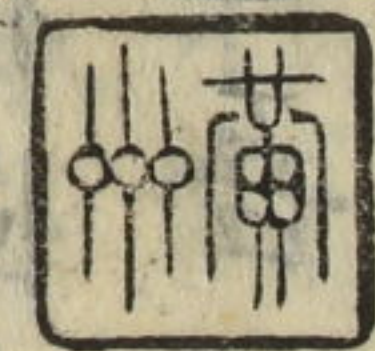
切

方問我○以答無言○此是問之可耳○
彼與是雖大小不同○談之猶賢乎已○
吁天賜此生○于承平洪化之代○雖白
屋屢空○乘時則尋花步月○自逍遙閒
亦牽隣文雅之場○而隔垣聞讀書耳
剽止二三○然圍茸雜化○下機如故○非
暴非棄○唯只天資然爾○玉屑靜夕○管
氏之子○携壺來慰予○弊履之蹇○世談

菱而有問○叩兩端而答焉○謏劣乏口
誦探筐中而示焉○而後區區○稗說筆
粃縷○為免園冊子也○吾一年寓居
于東奧之驛之閒○茅齋雨漏○此稿半
如粉蠹鼠繼破缺○既失八分也○管氏
之子今亡矣○昔彼手書之本○復得見
之一懷一感焉也○今茲有一客見此
草請彫刻○予曰○此冷癡符子為售○硯

人豈沽之耶。客曰：方圓狹長，各有用。賢愚所視，亦各有便。何敢厭乎？予曰：然。於是出入曰藁，而附書肆云。寶曆五年夏六月。

新井白蛾祐登選



牛馬同卷一

目錄

- 聖廟神侍 一
- 代々勅文 二
- 龜子代首 五
- 神代の文字説 五
- 度れいろは 六
- レロく 八
- 静ろ墓 九
- ひろ木 十
- 神道護摩 十一
- 同灵感 二
- 任右の託宣 四
- 齒城深 五
- 知孝説 六
- 柳虎 七
- 山登山所 八
- ひろ木 十
- 檀那 十
- ぬき袋 十一

○柏子 十一	○柏栢榧の例 十二
○標 十二	○ホウノ木厚朴 十二
○河豚炙 十三	○鮎 十四
○鯨流るる 十四	○娘 十四
○ヤクサ 十五	○クワ 十六
○迹屍 十六	○実盛塚 十六
○水尾谷 教經 十七	○丸 十八
○サクサメノトシ	○のせ 十九
○五十子	○道春先生の流 二十

牛馬問卷之一



牛馬問卷之一前集

新井白蛾祐登著

○或人紙の書を出て曰世待は何人の待たり也予問
 及れん
 示_ニ敕使 忽_チ驚_ラ朝使披_キ荆棘_ノ官品高
 加_テ拜感成_ル雖悦_ニ仁恩_ヲ覃_ニ邃窟_ニ但羞_ツ存
 没左遷名

予_ク白_ク是_レ天満宮の御作なり中菅家後草の及_ルを
 天満宮大宰府少_シ世と去_ル以_テ正暦六年を名_ニ標_ス
 菅原幹正安樂寺の御齋小_シ宣_ス命_ト文_ヲ續_クの同
 業_ト自然と世待化出_ル世_ト待_ト今_レ待_ト入_ル外_ニ記_ス為_ル

牛馬問



安置と云ふ事にて太政大臣を贈り終る事と云ふ也
 或人曰か怪異なり事去かり也 昔て曰天地の圓は皆
 怪し其れは此の圍を此の交の若さ名と稱す化
 雷風のさうくく 驚乃海干き亦同別笑るれは怪
 とも昔の民希く事皆人是とあやむのこ或人の自
 ちくく孔子何ん不後 曰小人は知識うと一物乃る海
 ちくくそのをちくく又仍か一方事と仍りて人を欺く使め
 と無め終るなり一伏羲の時に治る出禹王の時に神皇
 お舜乃時に鳳凰舞孔子に時に麟出の類い又を二也
 歐陽永叔が此の事を破りて信せりりも初学乃迷ひ
 を開くるは又補ひるも絶て止出はわたり

○横州高柳の下民陰謀の事一儀を論じ既小筆定て
 明の死飛ぶる事あり余を救済之責もなり現もあく事
 位のみ来りぬ人我は是菅原の神し卿が陛下に民盜
 らる刑にありら彼ら母我社以来て歎く事甚し破
 民盗人の名とあるとらふも事と老る母と出さすま
 世飛ぶるに盜りと孝心おねて死救一治られ作ら
 臣に感歎ましく急事なり司中命しめ物に志の飛人
 と天海言此神皇の事多目を費文とらふ命を助け
 内進教をさきより送付不思儀の命をばりしと神の
 冥感孝心よりもの也願ふも此業うしくこれわ神皇此来
 の路をも寄附ぬひ事救済るは是は神皇著記の事

牛馬引一

三

史の下の傳て予を不奉^{フク}地^チの^シ人^ニの^ハ法^ハと^アて^テ受^ケ
○或人の曰我知乃帝王は是也賢なる曰意^{コト}の^ハ同^シ
事^ハは^シく^テ之^レを^シ延^ビ茲^ニを^シ代^シと^シて^モ憾^ハへ^テ賢^人野^小を^事事^ヲ
紙^ハ不^顯然^ラら^ズの^ハけ^まく^も賢^人の^ハみ^この^ハま^は
天智天皇勅曰万人を助けむとあり予の二人を飛^ツ方^ニ
人を教^コえんとたり予の二人乃は之を教^テ朕^ハは^シの^ハ万人
乃乃心^ヲを^若若^ク先^ニも^もあ^らむ^の葉^ハは^まま^も皆^ハ之^レの^ハ
善^人と^{あり}亦^たなり^の國^ノの^ハ父母^として何^レの^ハ國^土の^ハ子^ニて^は
り^らざ^り人^をさ^す中^にく^と父母^ハは^は教^へず^る事^{あり}ん^べし
朕^ハ天^皇勅曰朕^ハは^はは^は人^を示^しる^事を^國土^ノの^ハ邪^ノ亂^ノ
の^ハ罪^ニせん^ら万人^ノの^ハ賢^人も^も事^をさ^する^事を^國土^ノを

極^ハ人^ノの^ハ消^ス失^スる^事なり^のの^ハ意^ハは^はか^らず^にま^はし^たと^もあ^らわ^ら
ま^しく^も今日^ハ試^ミむ^事なり^のの^ハか^らず^にま^はし^たと^もあ^らわ^らず^にま^はし^たと^もあ^らわ^ら
と^ハ元^ノ源^{ナリ}なり^のも^も天地^ノの^ハ善^ハい^はなり^のも^もむ^すむ^すく^も世^ヲを^流る^事
あ^らむ^のの^ハた^らわ^られ^らる^事なり^のも^も賢^人も^も事^をさ^する^事を^國土^ノを^邪亂^ス
あ^らむ^のの^ハた^らわ^られ^らる^事なり^のの^ハか^らず^にま^はし^たと^もあ^らわ^らず^にま^はし^たと^もあ^らわ^ら
村上天皇勅曰朕^ハは^はは^は人^を示^しる^事を^國土^ノの^ハ邪^ノ亂^ノ
予^ハは^は子^ノ孫^をた^と不^孝乃^ハ身^ヲと^して^もい^はす^も後^ハ吾^レ邦^ヲ流^ス
事^{あり}ん^べし^のも^も賢^人も^も事^をさ^する^事を^國土^ノを^邪亂^ス
天命^ハふ^らむ^事を^おり^のも^も賢^人も^も事^をさ^する^事を^國土^ノを^邪亂^ス
花園天皇勅曰朕^ハは^はは^は人^を示^しる^事を^國土^ノの^ハ邪^ノ亂^ノ
理^能あ^らわ^らぬ^事を^おり^のも^も賢^人も^も事^をさ^する^事を^國土^ノを^邪亂^ス

牛馬河一

三



おりやたりふ事好一君万ののわし一を心あて一は
 送りんるのうはな一ま事なも人乃後^{カキ}万の乃
 いま一先と好ん事い誠^{ナゲ}く記事なり一後^{ユウ}孫能
 さまあをわてとく一みおとの返わさうめ一お免
 けらと久一か久一
 後小松天皇勅曰吏王下のわろ一と一七の民と一り小樂
 一と一民と一り一と一神^{テキ}明の誠を味方と一奇^{キク}旅を
 歎とす^{テキ}り付と云う好一この民も一園小遊^{ユウカク}客の法候を
 一賤^シ一とさうらおも心よとて賢^シ試りらひ貴ささう
 くらも邪^{ヒルヤ}なら誠するの付らあつちと久一か久一
 後宇多天皇勅曰吏世の人乃人ならりのの心事也

考ふ人の恩^{アケセウ}を片の依^{カク}わはらうふ若事とて後^{カキ}は
 候つふよ人乃あや一と一は一をいふとあはれとを人れと
 幼の命と不命とを見て扱^シはらふ出たのこまへ世の
 申乃人のあまきとを人らりひておりてを和一とて
 事一とら好一とれ
 後柏原天皇勅曰君^{ミコ}のよのよみなり一のと異^イ邦^{クニ}小
 は忠臣賢者とおもて勅^{ヒトヒニ}碑^{イサ}刻^キ忍^ニゆ一と考^{カウ}外^ノの
 毛^モあ^アを世^セ出^デ方^ハと^トな^ナわ^ワら^ラう^ウ園^ニは^ハ古^コ今^{イマ}忠^{チウ}臣^ジは^ハ孝^{コウ}子^シ
 も多^タく^クれ^レも^モ系^{ケイ}紙^シ下^カふ^フと^ト一と^ト免^メて^テ由^ユあ^アと^ト免^メて
 不^フ記^キ一と^トら^ラ世^セ事^ジ由^ユの^ノわ^ワら^ラう^ウと^ト一と^ト免^メて^テ由^ユあ^アの^ノ城^{シロ}を
 り^リて^テあ^アと^トひ^ヒる^ルは^ハも^モあ^アふ^フと^トあ^アぬ^ヌも^モ多^タう^ウと^ト

二馬月一

四

正親所天皇勅曰むく人々末世の人なるを書さる
り今の世人の身の事あり書成りてと書すは
と云ふ用ひところは名別なり

僕謹按 本朝乃いりて學校の政不修日藤
氏が違乱小日記多くらせぬ世より事書
徴とすり又そのころ事書修むるも事書
乃と記めて天勅文のなると只書成りて
後世より事成りての事

○住吉神託宣ふ我々神託なり 慈照を以て神託と
て我々神力あり正直誠以て神力と我々神通なり
智恵を以て神通と我々神力なり 慈照を以て奇

持と我々方便なり 柔和を以て方便と我々神徳と
慈照乃目みありと我々神徳なり
飛代あり我々神徳なり

右 神祖は子孫を授けし又の作は慈照と我々
乃私欲より出て天下の礼を奉りて我々の事なり
と御教訓ありしなりと我々の事なり
○神祖遠祖より天神の城を責めし時討死の者も首
実檢遊しけり中より年乃比十六七なりなりと假
よの事ありて我々神徳と我々の事なり
○神祖は子孫を授けし又の作は慈照と我々の事なり
中へ入る白服なりと我々の事なり

るは男なりと御教工任し昭々明記見たり時
明く見分かれ男小定りぬを及おされたり粟田
刑部キヤウブ 窪テウマイ 堂の山姓且時田窪千代といふ前目と區
そののよきものなりと減ふ可也

○日本女此齒と深き事いぬと増れ定りてのよし
色へ愛さる能く主婦の間もあつたりといふ事
のよし不復長人も齒と深き事いぬと増れ定りてのよし
知し爰用集ふ見へたり

○或人の曰近世神道者流又ハ巫祝の軍神代の文字あり
とて端半乃壁と遠く方始のよしありてのよし
ありとてこの邊生ハ穢等と出たり異小の方始者流

の符小書偽字ハ類ハし以てカラス也 若て曰是下れ
し知志ハ印も先手亦神職の人なりと云ふ見し
る又も及細井氏廣澤著凡親書百禱の書中
見たりと云ふ事もお似たりとのし相りふ我知乃上
若文字ハ及くは從多く曰書見入りては世
小及人人好事の果信終り後と作るとも正史
實録シツロク 小松て見たり事ハけり凡皆書延キヨ たり文字
貴族と通して天下の人皆志るる一人の私あり
のよしと云ふのよしありて日用と通達し世に傳ふ
りのたれんキエウセ 流矢ぬき道理と相り既し漢字流
布し園用可也タシヌ 後ハ行儀ハ文字と造り
す今亦不絶況や漢字ハ記の次第ハ民此日用流

通せりとのたてしや
 一客来て曰^{ツジ} 辻^{コム} 躡^{シツチ} 躬^{ガシ} 扱^{スキ} 柙^{サカキ} 困^{カラシ} 鰯^{イワシ} 鱈^{タラ}
 なるは文字尚多し 物に律代の文字も多し 類ひる
 愚蒙なり事^{モウ}の云々 是亦天武帝^{イシツツ} 石^シ 積^{ツキ} 等^{トウ}
 勅^{チク} して新字^{シンジ} 或^カ 造^{ゾウ} して 日本^{ニッポン} 紀^キ 亦^オ 見^ミ 入^ニ 入^ニ 漢^{カン} 字^ジ
 の字義^{ジギ} 字^ジ 殊^カ と^ト 像^{カク} り^リ 造^{ゾウ} せり 固^コ 之^シ 抄^{セウ} 入^ニ 入^ニ 律^{リツ} 代^{ダイ} 也^{ナリ}
 文字^{モンジ} 多^タ 紀^キ 事^ジ 意^イ 的^{テク} 一^{イツ} 異^イ 状^{ジヤウ} 之^シ 作^{サク} りて 世^セ と 悉^{シツ} 也^{ナリ}
 經^{キヤウ} 乃^ノ 徒^ト 是^シ 智^チ 賢^{ケン} の 所^{ショ} 悉^{シツ} 故^コ 上^ウ 遠^{エン} 言^{ゲン} 刑^{ケイ} 之^シ
 凡^{マン} 夷^イ 狄^{テク} の 國^{クニ} 之^シ 者^{モノ} 玉^{ギョク} 字^ジ 之^シ 皆^{カク} 僅^{ケン} 之^シ 字^ジ 字^ジ 也^{ナリ}
 能^ネ 世^セ 爾^ニ 通^{ツウ} 達^{ダツ} 凡^{マン} 我^ガ 知^チ の 以^{ヨリ} 乃^ノ 之^シ 紀^キ も 又^{マタ} 數^{スウ} と 九^ク
 成^{セイ} の 書^{ショ} 史^シ 會^{ケイ} 要^{ヤウ} 曰^{イツ} 宋^{ソウ} 京^{キヤウ} 德^{トク} 之^シ 子^シ 之^シ 僧^{ソウ} 入^ニ 貢^{クワン} 不^フ 通^{ツウ} 華^カ 之^シ
 長^{チヤウ} 筆^{ヒツ} 札^{シツ} 命^{メイ} 以^{ヨリ} 陳^{チン} 對^{タイ} 名^{メイ} 寂^{シツ} 昭^{シヤウ} 彼^ヘ 必^{ヒツ} 自^ジ 乃^ノ 國^{クニ} 字^ジ 之^シ 母^ボ 僅^{ケン}

四^シ 十^{ジュウ} 有^{ユウ} 七^{シチ} 能^ネ 通^{ツウ} 徹^{テツ} 之^シ 便^{ベン} 可^カ 解^ケ 其^キ 音^{オン} 義^ギ 因^{イン} 索^{ソク} 寫^{シャ} 一^{イツ}
 遇^ウ 勞^{ロウ} 繁^{ハン} 蒙^{モウ} 之^シ 字^ジ 法^{ホウ} 也^{ナリ} 之^シ 多^タ 之^シ 寫^{シャ} せり 字^ジ 如^ニ 是^{ナリ}

のろ 海 以 海 へ 也
 あり ぬ る 也 わ わ
 あり 八 九 子 洗 淨 也
 り じ り ぬ の 礼 也
 子 兮 け 不 也 以 也
 西 也 昔 也 あり 也 也
 急 也 也 也 也 也

日本國延曆寺僧寂昭入宋傳以是波之字也是

○近き僧長湯小て大清の人となり出合事時
柳の事と活すり小毒人の曰柳は天竺の小山と云
中夏も折る片出方事と云明く和漢法小片
とた好く毛糸不潔大概虎必以て大サも又大
ち方大即ち毛糸の毛出方射虎の猛と云も也
身よりぬ地へ休れて口足なきを以て口欲あき目眩
ぬさ死せりものごとくあて執く事好く柳を
見来て明く方乃中へ小夜なりて徐に歩之他あり
虎と云くも不細凡く道のま六所けりもはははんと
柳は比眼を明く柳乃後けと見ていふく他一切を
見て則起て近去り見若くきる極く虎と云く

此の流やを脈を故く今清の代小て渡羅の事
虎はとりのすと云ん
○今世よまて漢の法良と勇猛乃漢に画す事非
漢張良はかき美婦人乃くくあてり事史記小
見下り有象列仙傳にも見女はく画せり是の魏の
張遼と云ひ遠く方なり魏の法遼は武力小
その勇猛の仕と云く柳は山見啼射し遼来くと云ん
山見啼とて啼と止と云ち蒙求にも見下り今日在
嬰回城と云く名なりしてし口くとの事は
来知の附被遼来と云ひて山見と題しと圖法し口
くとの事は

○或人の曰く野山所々年法は色々を弁候すれども
平らなるをさうりたる長明が翁抄を考合すれば山所
の盛業平らに似あはれにけりあや 是れ曰くは
一國より一人の家女に内裏献せり。是れ亦仁の帝女
は其山所と名をとりてその山所に入るとはあはれ
后所のうちおろし地所おろしと名く山所と名れり
たれをいへば仕仕止て古くおゆりまらりて其
おろし山所と名くおろしと名く一國に山所と名く
多し。英懐尾注の問に二三山所を名く候ふて乃
山所と名く人とおろしと名く後多し。そとて其
方期長陸奥へ下向りて附龍精は目定むる所の生出

秋風の吹下は今もあはれくのお山所と名く正院
の娘乃山所なり又屋敷秀の所様と名てたり
附山と名くさるは根城をえと名く後おろしと名く
を権國分りむと名て山所なりけりしつと名て人の足
えつらんのお又業平の詳は細るといひしと名て山所の
山所良実の娘の山所しと名て大伴の妻ありと名て附
慢最甚しと名て自然歎け深しと名て仁常陸玉造
義宗のむと名て山所なりけり一人ありと名て附山所
異なり事ありと名て申すも良実の娘の山所は其人
和歌もすくいと名てれは獨り名多くすて其人の
傳へ来るのこ

○淡州小栗田の志をぬち墳ありそ塚の四面木と植
て籬とてそ木郷人むろと号とては木本の鼻尻不
費記用り本なり故ふ木本の男是を切て故に海女
そのゆへ海下りたりしてて心はひりあつた人へ向す
われん我ら志静なり世郎より上我塚の木を切ら
根傍なりと号し商人不費し静と何人たり也誰と
はおろり九郎義経の妻静なりと号し里人の曰徳は
皮及ふ静の上より一さし静後ゆり皆人疑ひ中
ましとありは西と号し作りあんとてん麻ぬれ静
といふ別麻と出せは彼木本の野老麻と揚て静後
見る人感懐せたりはるしそ中より老人智とあげて

曰静はあはれおも達者なりと受迎の幸ふ一首
吟し曲といふは半烟麻は頼みあて志んく案す
静と見へし首とよえ

同くもかくて静り墓ありあつた松尾村
名譽後し是の静り古墳なり事と志しり是近代の
事ありて今は修め静は之被死ありとの古事ありとい
ふりといはん

○むろといふ木津石不知名都を過りてはムヤナキ
といふ所のよて木のれは君記用り世ムヤナキも和
本見て漢むたて見程なり

○源之位於政乃静世じりて本代記嘆事もがらり

の方便俗小埋本と云ふ者なり本は經とすは經也
無花果和名トモギ一名イチク和名トウガキ
との方の是なり世未だ知らず事ありて實と法
との實秋と知りて後さげて赤く熟しけりのは
徳也

○或佛書云曰檀那との十檀を本は名なりて葉
類りて面りて那の葉は名なりて是の面りて
故ふは葉檀木の下ふ生じ地の処にて生長するは
石の故に頼りて檀那との正説可案の云檀那
は梵語也唐云施と譯とおまに施と云義也
檀檀といふ名の又檀香といふ名の那といふ葉

ののののの

○神道若流ふ並昧と云はるる未方事多し何と云ん
の流し神は護摩といふのと修と護摩は梵語なり
天竺の事ありて仏法より修りぬ神道は元來
と聞ゆこと也

○或人曰華礼ふみ七代率都婆あり是なりと又神代地
神代と云はる神道の華具也又弘明傳といふに
神代はわさ袋はぬすに用ゆと御名を香也 予言て
曰皆無稽の妄言なり神代はわさ袋といふは華礼
の具はたわさ袋集いありてはるるに人乃而
かゝるはふみしすまらけりぬは袋をいはるること也

みるの紙をぬきよ切て五色の糸にて隈をす紙を
 袋に入ふりぬきよ切て五色の糸にて隈をす紙を
 工か花あて送しとし是及紙神より向て約路
 雅と遊方なるり行なり唐ふて柳條を用か難ひ也
 ○かハハといふを拍子と書て五拍といふす也
 神と送す方射の用ゆふわの素を振す射もよを
 拍となり日本紀み入ふては礼目むえりり元
 中義ふんも是わの周禮ふ振動といふの是なり
 叔拍の字と目今の俗のやを後るなり来る事
 久し故に拍と拍といふ字は得てかハハといふ
 ろくハハなりハハと後と後とわの拍と拍との結

作りて曰いふハハの葉を用て合拍を感はるを
 拍て繕とすじ拍といふハハといふは事知共の笑ひを
 開くを毎夜は地を清といふ儒共乃本脈と賣商人
 くの味をうるを紙にて抄入ふ信のよは是結なりと徳念の
 ちうらちとちとちと加ふ今こらうらちとちとちとちと
 といふ或人の白えれいおまら情字の事ししとちとちと
 かりん山本結をんてかて回合なり来なり上京ありて
 と入ふり南地にて修り地地りち是結と中事なりと
 一袋しけ紙神かハハと後と後と又毎るハハ也
 ○或人の曰拍の字かハハと訓するハハ 市書て曰拍
 は私名コノテカレワ又古訓ふカエとのハハ不愛といふ

娘の身まゝおぬと使ツウレ奉ホウ礼レる人モ信モ棺ハシ中ノハツカ
成ケ入リ煙ケムリとなすぬ是は世英セエを焼ヤクくそめはひ屍シカバネを
やまゆらひるわち後シムコなる人もし事コトをわてや後ヨメの
小母コモ乃ハびりて御ミまの文煙モンケムリこつ子コ代トはるを焼ヤクなり
と御ミて主事ヌシやぬれぬけし英エを子コの代トと御ミて今イマの
人ヒト鱸ヨシ魚イサを以モて是コトなりといふも鱸ヨシ魚イサはわらぬ草クサ此
後チノ其コノ具ツグ如シ尸シと云イハれんて後チノのノがらへ

○或人の曰イハれ給タマふ初ハジメ女メ也ナリすて娘ムスメといふ又母ハハもこの
長幼ナガコト通ツウして娘ムスメと稱ナヅケと娘ムスメの字ナリ何ナニの義ナリ 是コト曰イハれ娘
乃ハ字ナリハ嬢シヤウの字ナリ此コノ俗ソク字ジ存ゾン世セ乃ハ文字モノしりしハ女メを号コウ
して嬢シヤウといふ今イマ又娘ムスメの字ナリ此コノ義ナリと通ツウといふも中モロ義コト

あつたかて婦女トウキウセの通稱ツウケムと云イハれ又男子オウジも娘ムスメといふ
る陶トウ九ク成セの曰イハれ子コ謂イハ母ハハ曰イハれ娘ムスメ世セ謂イハ孫ソノ曰イハれ老ラウ娘メ
女メ巫フ曰イハれ師シ娘メ都ト下ゲ及キ江カ南ナン謂イハ男オウ親ケ亦モ曰イハれ師シ娘メ娼シヤウ婦フ
曰イハれ花ハナ娘メ遠ト且カ又モ謂イハ草クサ娘メ苗メ人ヒト謂イハ妻メ曰イハれ夫ウ娘メ苗メ人ヒト
謂イハ婦メ人ヒト之ノ世セ終シマ者ナリ亦モ曰イハれ夫ウ娘メ謂イハ婦メ人ヒト之ノ身ミ殘ゼン者ナリ曰イハ
某ナニ娘メ曰イハれ幾イキ娘メ鄙ヒ之ノ曰イハれ婆ハハ娘メといふ也ナリ今イマ見ミ
ふのよと云イハれ山ヤマといふも異イハなりとの

○此コノ父ハハの云イハれ我ワガ受ウケてよハ以コノ来カタ新シン言ゴン義ギと云イハれ
ヤクガベラホウ今イマ何ナニと云イハれしりしを忘れぬ是コトと
謂イハれ後チノの云イハれ葉エフの云イハれ世セの人ヒトはけりし事コトもあつた
も今イマは天下テンカ乃ハ常ジョウ流リウとなりぬ也ナリ也ナリ也ナリと云イハれ

ふゆのの

○名取田名取の實を記すの事実ありて名取先子
 のの近江の藤系は實を別南實盛う古墳を名取
 比地をむ人の曰今より其地を蛙入事なりといふ實
 盛討死に加賀の藤系なり何れ近江の藤系より来て首
 級ありん是名取よりして作りのありん又日向の藤系
 郡竹篠村の山法寺といふ古小徳七之藤系清り古墳を
 といふ歴代要覽といふ書に記され我々より記れ
 とも景清之後を流せしむるを記すに後念志
 成按すの長門平家物語に曰建久六年二月
 十百大仏供養あり 此村の 上総龜七兵衛景清經

余殿へ降人ふあかりの起因た清門尉義盛不承り
 若平家不候せし故に少くもに盛るる後盛るる所
 之不承一應とせめて查先より記すは縁の事なり
 可し寄書なりといひておのり他人より記す
 給と申けれは八回右場門尉知家又頼らの好むは太
 供養の日を教へて同七年三月七日ありてあつるふ湯水
 止て終り死すありとあり東鑑不頼朝に建久六年三
 月十四日御上落りて同年七月八日換念より著御とあり
 不我盛知家も供養をせられぬ系清り死去建久七年と
 おれん後念より死す事ゆかりと景清らむとあり
 九と龜石乃古不承りといふ事一之雲の荒林の好む人

丸塚とて其塚今も存あり彼は考りて世嚴密の法
 りて死す方終とあるは是と心從とす一倍彼の法破
 又眼をくり出し方事日向句苗之れを誓ひけり
 ○其人の曰之尾谷は即は何人れ 善て曰いまこそ人
 乃傳とあるは其化し曰宗聖義經といふも一付
 事とありひねひ給ふ京法沙心察し義經討討方
 沙心とあり人の事と只一人陸ふあり四角八面一切
 男對し小林郭とあり合ふ叶いと逃れと頼と死
 引さむ終し頼と死れりとも其尾谷の法ふあり
 又曰一谷落城の時平家云達大方討と死に生捕は討
 門根大酒言教盛々の是男能くも教師兵庫あり下町

たり方坤の方駒林といひ如きは落給ふ安國遠く書
 義定只一騎あり追りけり其人多く法和天皇七代後繼
 新羅三郎義光の孫也見冠者法光の男安國を討
 義定なりと追りけり其教師も馬に上り倒れ大に驚
 たりりて引て板あきまは義定が甲ふありさるは
 教師もさる下り下義定は紫のり首を取んとせり如義
 定は押す一條次郎忠頼といふ其の馳來後下り担ひ下
 終し教師と討れける平家の軍中侍(團)の法從に
 て團敷ふ焼と失ふりとも討し徳州橋次の中は是は
 知子唾するなり故又教盛ゆくとお救ふもあられよと
 又紀左郎と欲立れしは兎才氣とてそえのいすりを

○忠臣内裏女房と稱り奉時が御子孫に傳へし新しき
一院より御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
要のまじりくとも御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
冬入りし御女房何事なく御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
若止ぬ是の御女房何事なく御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
かり御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
○英徳の國の人來りて赤子其事とイガゴとの都究
せり御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
目録卒日の説ひとの御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし御子の誠忠に傳へし
云葉し御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし

小徳りたる御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
中國通し御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
花の御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし御子の誠忠に傳へし
世の御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
○林羅山と云ふ御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし
の御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
二つ御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
く御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし
御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に御心を傳へし御子の誠忠に傳へし

日義なりあより宗の室へ入上との相めはけし
り此上は寢るものなりしは此は内田信州因て曰
徳念乃令伏中はソツケ堂との事むじし令固大
細之故地乃風京と書といふも筆は不及し人を
控てソツケありしはよりのひ侍とを松
もを基跡といふ事実あり又ソツケとは何は此文字
が名も道書きてソツケと在仰の事也(相令思ふ筆を
控て仰するありしは從從なり故堂は令伏の
権子の宿山越する所の故乃志代を記すは是は
堂の故坂より其の世堂を仰見たりし仰見堂と
いす)此は内田加州尋て曰童初左の控ひは友

と集てきたのものを考てかえり思の四といふ事と凡そ
此(洞はダイドクくダイガ娘ハ梶原アノウジ盲杖ヲ突
テ通ル處ヲ去ハヨツテ終ノケといふ是も又故ある事
とも著て是れ初々の涉耐清意いひ出はしんて感
は極ひし方人とかえりて)を子細に一はダイドク
と片涉登所政子の涉方なりしは慈殿二も慈殿也
續でかきし(まきのなり)といふ事よて慈殿くといひ
祿(ヨク)著がしといふれ初乃大権素清如水冨者乃水
此方といふ是又露電の娘よて感勢ありしは橋本と平
三原(耐)此はアノウジと在安の寺といふは奈耐政乃妻
叔の涉方此は一族が盲人と改て初初の出世におも

水田^{ミヅ}休^ヒ一^ヒ沙^サ然^{ゼン}て^テ種^シ彦^{ヘン}も^モ故^コと^ト突^ツて^テ去^キり^リと^ト安^ヤる^ル
不^フ行^{キョウ}を^ヲ不^フの^ノ其^シ傍^{ホウ}に^ニ居^イて^テ其^シ終^{シユウ}工^{コウ}と^ト是^シと^トい^イふ^フ
なり^{ナリ}一^ヒ一^ヒ一^ヒ白^{ハク}蟻^キ徳^{トク}倉^{クラウ}志^シ蹟^{セキ}按^アす^スり^リ一^ヒ里^リ佐^サ江^{ケイ}ノ^ノツ^ツケ^ケ
堂^{ドウ}と^トい^イふ^フ世^セ叔^{シヨク}は^ハ地^チの^ノ以^イ京^{キョウ}緒^{キョ}れ^レて^テ富^フ子^シ山^{サン}上^{カミ}總^{ソウ}下^カ
徳^{トク}房^{ボウ}州^{シュウ}乃^ノ之^シを^ヲ不^フ結^{ケツ}見^ミ之^シ於^オ八^{ハチ}京^{キョウ}を^ヲ服^{フク}あ^アる^ル也^ヤ
天下^{テンカ}の^ノ徳^{トク}系^{ケイ}を^ヲ以^イて^テ能^ネ見^ミ堂^{ドウ}と^トい^イふ^フ又^{マタ}い^イふ^フ一^ヒ堂^{ドウ}を^ヲ
故^コ能^ネ見^ミ送^{ソウ}と^ト書^カけ^ケは^ハ義^ギ送^{ソウ}春^{シュン}の^ノ後^{ノチ}工^{コウ}接^{セツ}れ^レて^テま^マし^シて^テ
梅^{ウメ}花^{ハナ}を^ヲ盡^{ジュウ}藏^{サウ}す^スは^ハ濃^{ノウ}見^ミ堂^{ドウ}と^ト書^カけ^ケり^リ

牛馬問一終

牛馬問一終

